

投句欄 自由律の泉

23

- | | | |
|----|---------------------|---------|
| 1 | 出鱈目ネット世界 破壊 | 大岳 次郎 |
| 2 | 今日もゼロが埋まるわたしのスコアボード | 久光 良一 |
| 3 | 寝そべり人生もいいさ口下手な蛙 | 金澤 ひろあき |
| 4 | 盛り塩も夏めいて | 木村 浩 |
| 5 | 紙ヒコーキあたるひたいの春 | 野谷 真治 |
| 6 | 過ぎし日漂う真昼日のシルエット | アカホリフキ |
| 7 | 逃げるように早退 | 無 一 |
| 8 | 空っぽにして逝きたい | 植田 鬼灯 |
| 9 | 姉の猫背が母に似て銀杏を拾い | 小山 榮康 |
| 10 | うれしくてうれしくて雑草が春 | 泥谷 文吾 |
| 11 | わたしの大切なもの見つけにきた地球 | 竹内 朋子 |
| 12 | 生徒喜ぶ 五人で作るひと扇今ふたりに | 増田 壽恵子 |
| 13 | いちご摘む小さな手のためらい | 原 さつき |
| 14 | 山のとっぺんからオーイ | 三谷 宜郷 |
| 15 | 過疎家畳む子供の日 | 岩井 汗馬 |
| 16 | 風だけが友の山道を歩いている | 池田 恵三 |
| 17 | 罷撃たれ桜の骨はゆるやかに | 井尾 良子 |
| 18 | 雨降って森は薫りを深くする | 黒瀬 文子 |
| 19 | ただただ無事を祈りいよいよ梅雨入り | 山本 説子 |
| 20 | 母の日のあじさい 月のうさぎだつて | 平岡 久美子 |
| 21 | 深い闇を抜け濃い闇となる | 一の橋 世京 |
| 22 | ツバメもハチも巣を作る雨の玄関ポーチ | 大迫 秀雪 |
| 23 | 四十八で死んだ母のずっと先を生きている | 青井 こおり |
| 24 | 思い出も 顔も忘れて 面会室 | 見崎 厚志 |
| 25 | 昭和のビデオに母をさがす | ちば つゆこ |

● 泉②より 一句鑑賞

26 孫とした講習会はチョコキの出し方 田中直心

27 雨の香こぼしダンプの走る 田中直心

28 どの色にも染まらぬ雨の白いあじさい 佐瀬 風井梧

29 風よ吹け 俺に吹け 帆を満たせ 部屋 慈音

30 丸くなって父のドーナツ穴 さいとうこう

31 また逢える道があるから来ます 萩島 架人

32 濡れたあじさい青の重さ 篠原 紀子

33 手から箸が転がり始めた雨音 富永 鳩山

34 あの人が死んで聞こえた秒針の音 佐川 智英実

35 猛暑 皿まわしの皿がまわらない 富永 順子

36 消えてゆく私にルビをふる 平林 吉明

37 ふはふはと酒のやうに生きるがよろしく 湯原 柳泉洞

散骨の海にさげぶ

三谷 宜郷

▼ 卒寿を過ぎて生きるは、いくつかの散骨に会います。森や海だったりしますがそれは石の墓前の時より悲しみが迫って来ます。短い表現が更に悲しみを深めていると思います。

(小山 榮康)

▼ 海にさげぶ姿が目につぶ。五十年來の付き合いがあつた我友も生前の希望通り海に散骨された。その時の様子をCDで奥さんが送ってくれた。「父さん自然に還る」彼も大河の一滴となった。

(泥谷 文吾)

とぎれとぎれに想い出を抱きしめる

富永 鳩山

▼ 「抱きしめる」という言葉に想い出される事々は温かな楽しいことと感じられ、過ぎてゆく時間への切なさも感じさせられました。よい想い出は心のふる里のようにも思います。

(竹内 朋子)

▼ 「抱きしめる」って素敵でございますね。きっと沢山の素晴らしい想い出の中におられる事でございましょう。

(山本 説子)

(見崎 厚志)

溶ける氷河はなんの涙か

青井 こおり

▼ 温暖化が進み氷河が溶け出し多くの島が水没し多くの人々がふるさとを追われる。北極の熊もエサを求めて氷の上をさまよっている。映像を見ると胸がしめつけられる。どれだけの涙を流したら生きとし生けるものが幸せになれるのだろうか。

(井尾 良子)

風にきこうか別れ道

佐川 智英実

▼ 道がある。ぴゅうと自分に吹いてくるのもよし。そうさな道が分かれていて、こっちはどうだと風が吹くのもよい。人間の思惟などというのはちっぽけなことだ。ええいままよの風がこっちよい。(湯原 柳泉洞)

※今号の26番の田中直心さんの作品は「自由律の泉②」の投句の際うまく届きませんでした。今回合わせて鑑賞をお願いします。

また会えるね閉まる扉友の潤む瞳

佐瀬 風井梧

▼個人的な事で、私の友人が入院をしまして、見舞いに行った時の事を思い出しました。年のせいも有りますが、潤むままではなりませんでしたが、気持ちがよく分かります。

(木村 浩)

かわいいはいやらしい

大岳 次郎

▼考えさせられました。

(無 一)

吐いても呑み込んでも本音は苦い

久光 良一

▼どちらの行為も人と自分を守るためですが、本音は口ではなく眼で伝えれば苦味はありません。でも良薬は愛する人には吞ませてあげた方が良いかと思えます。

(三谷 宜郷)

しずかに用意するか下帯

植田 鬼灯

▼今頃に産まれた子供たちが成人して働く人たちになります。それは、戦後百年の頃です。あまりにひどく荒らされてしまった日本文化であり文明であります。三S政策も完全展開です。下帯を静かに用意しないとイケません。

(大岳 次郎)

初蝶迷い込む公衆電話ボックス

野谷 真治

▼初蝶も電話ボックスも、実景というよりは、心象風景ではないでしょうか？ 初蝶は自分自身であり、電話ボックスは世界そのもの。こんなにも狭い空間で迷い悩み続けている事の愚かさ、早く電話ボックスから抜け出さなければ、とは思いつつ外の世界はあまりにも広すぎて、逆に恐ろしい。しかもその外の一見自由な世界にも、スマホというより強力な拘束機具がはびこっており、結局人は檻の中に居たがる。自然に溶け込むことを忘れた現代人には、自由ほど恐ろしいものは無いのかも知れません。

(大迫 秀雪)

昼酒の木の芽時

木村 浩

▼新緑の窓の中の景色をイメージします。作者が羽をのばす真昼間の情景が連想されます。ゆつくりとした時間が流れる穏やかな日和の味わいだろうか。

(アカホリフキ)

普通の男の寂しい背中

原 さつき

▼単純明瞭で哀愁を感じた。普通の男がいいと思った。男は背中で語るという決まり文句があるそうでこの句から孤独感だけでなく、多くの人々が抱える問題がにじみでていると自分事のように思った。

(岩井 汗馬)

これに乗らず次の電車で眠りたい

岩井 汗馬

▼疲れた帰りの駅で、満員の急行電車がまさに発車しようとしている。とても座る余裕があるとは思えないこの電車に乗るよりも遅くてもいいから次の各駅停車でゆつくり座って帰りたい……。私にも覚えのある心境である。

(久光 良一)

柳の芽吹き風の揺り籠にのる

竹内 朋子

▼柳が春風にそよぐ様子、芽吹いたばかりの浅い緑が目には浮びます。揺り籠は赤ちゃんを乗せるもの。新しい命の喜びに満ちています。

(篠原 紀子)

戦なき廊下細い細い三日月

井尾 良子

▼この句から渡邊白泉の「戦争が廊下の奥に立つてゐた」を憶った。そして今の日本、戦前に近づいているという。かろうじて戦がないのだが、出ているのは限りなく細い月。その細さから、危うさが伝わってくる。

(金澤 ひろあき)

タンポポを胸に今日だけの勳章です

黒瀬 文子

▼自分を褒めてあげたいというフレーズがある。人それぞれの一日に起こることへの満足感あるいは疲労感へのねぎらいとして自分を労わる。

黄色いタンポポが美しく見えて一つつんで自分への勲章とした、その心がいいですね。

(部屋 慈音)

五十回忌おじいちゃんのメガネ笑ってる

平岡 久美子

▼数年前、三年前か、祖母の五十回忌の知らせがあり、法要を行ったことを思い出した。「メガネ笑ってる」が、なんともいいなあと思う。

(野谷真治)

見えてる頂 なかなか大きくならぬ

池田 恵三

▼山登りをするとよく出会う。頂が見えれば、もうすぐ頂上と気持ちもハイになる。どっこいそうはいかない。見えていてもなかなかおおきくならない、頂上に近づいてはいないジレンマ。この句はそうした山登りをいつているのではないのでしょうか。人生の山登りが適切なのかなと思う。

(佐瀬 風井梧)

花の白さ暮れなすむ風の日

荻島 架人

▼花白く風に揺る美しさに、陽が暮れるのを躊躇しているように感じました、素敵な心遣いです。

(田中 直心)

忘れても焔は芽吹く

新山 賢治

▼あなたの句の様に私も露焔に何もしないでいます。春になれば露の臺、茎、葉を全部おいしく頂いています。でも今春は葉が傷み、害虫がいることがわかりました。駆除やいろいろとしました。来春が楽しみです。

(増田 壽恵子)

手すり途切れてよい月に会う

さいとうこう

▼情景が目に浮かびます。「よい月」と曖昧に形容することで、読み手に月の形を委ねて下さるのがうれしい。見上げた先の月に、重なるホツとする一日。

(原 さつき)

▼手すりをつたって足元を確かめつつ歩いていたのでしようか。その手すりが途切れたので立ち止まってふと顔を上げてみると月が浮かんで

いた、と読めます。困った、と思った瞬間にそれが吉に転じる、それは往々にしてあることかもしれません、それに気づけないことも多いものです。月はそうしたことを気づかせてくれるものの象徴かもしれません。

(青井 こおり)

▼階段の手すりが途切れて夜空を見上げると、そこには大きな月が出ている。つかまるもの、頼りにするものを失って気付く自分の弱さ、それを静かに見守っているような月の明るさ、人生の真理でもあります。

(平林 吉明)

▼無駄な言葉が一切ない。それでいて手すりが途切れた瞬間にぼっかり浮かんだ名月が浮かぶ。すばらしい句です。

(ちば つゆこ)

振り下ろされた妣の平手も懐かしく

檜 幽可

▼人はいくつになっても、それより年を経るほど、亡き父母が恋しくなるようです。自分がその年に近くなるからでしょうか。お母さんが自分のことを思い手をあげられたことも今になれば良く分かって懐かしい。そんな思いがいつぱい詰まった句だと思いました。

(平岡 久美子)

● 係より

ご冥福をお祈りいたします

「泉」の常連だった檜幽可さまがご逝去されました。いつもニュースが届くと一番に句が届きました。本当に寂しい限りです。

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

送り先▶ T193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

※投稿先のメールアドレスが変更になりました。

締め切り▶ 2024年8月25日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでも紹介させていただきます。